

## 高橋広満著『近代文学の古層とその変容』

助川 幸逸郎

私がこれまで読んだ書物のなかで、もっとも書評しにくい一著かもしれない。

もちろん、退屈だからではない。近代において文学がいかにして存立してきたか、その核心に触れる議論がここでは展開されている。内容だけでなく、それを語りすすめる文体も魅力的だ。「華麗な美文」を誇る日本文学研究者は多いが、高橋のように、いかなる話柄も「等身大」で——矮小化や誇張をせずに——描きうる書き手は稀だろう。

本書の「書評しにくさ」は、モダニティという概念の根幹にかかわる。

資本主義社会は、未発達なフロンティアを収奪することで利潤を得る。そこにおける「合理性」は、「未開」や「非合理」とかわるかぎりにおいて維持されるのである。いっぽう、資本主義社会の効率至上主義を撃とうとするモダニズム芸術もまた、「未開」や「非合理」という「古いもの」を挽りどころとする。

そういうわけで、近代芸術における前近代的要素を論じる場合、話は二重三重の複雑さを帯びる。民俗や語りといった、近代文学の中の「古層」をあつかう本書もまた、蛇行するように行文

をたどることを読者に強いる。

たとえば、本書の第一章「語り手の近代」では、説経「山椒大夫」と鷗外の小説「山椒大夫」の差異が、「語り手の被差別性」という観点から論じられる。鷗外の「山椒大夫」を、「被差別の烙印を押された肉体の語り手を失った近代小説」だと高橋はいう。そのことは、鷗外小説が説経作品にくらべ、差別者と被差別者の差異を縮減させ、双方の融和をはかっていることに対応している。

高橋の見解に、異論をはさむ余地はまったくない。鷗外小説と説経作品の違いは、ここで指摘されている点がまさしく「キモ」なのだろう。ただし、近代小説の語り手は、ほんとうに肉体の語り手を失っているのか、という疑問も同時にわいてくる。「非合理」を完璧に排除した資本主義が利潤を失うように、語り手の肉體性を少しも留めない近代小説は魅力をもてないのではないのか。

近代口語文を成立させるうえで、「語り手」の現前性をいかに確保させるかが大きな問題であった（このことは、早くから桂秀実などが論じている）。語り手の「生身」が伝わってこない「中立的なエクリチュール」は、読み手に「文学」を感じさせないのだ。もちろん、近代口語文における語り手の「生身」の顕われ方は、説経節とは違う。近代小説において、語り手の「肉体」は露呈せず、隠微なかたちでそこから立ちのぼってくる（どの作中人物と同一化しているか、文末辞がどのようになっているかetc...）。

そのようなかたちでテキストに痕跡をとどめる語り手のありよ

うは、「被差別性」とやはり結びついている。主人公と語り手の距離に近い「私小説」には、「主人公が悲惨な目に遭う話」が多い。反「私小説」系の作家たちも、『高野聖』や『吉野葛』のような、「語り手」主人公が「被差別」の傍らに立つ作品を書いている。

近代小説の語り手の「肉体」、およびその「被差別性」——高橋自身、こうした問題が存在することに勘づいている。本書の第三章では、『破戒』の丑松と『竹取物語』のかぐや姫の等質性が論じられる。そこから、『破戒』の語り手と竹取翁（もしくは「竹取物語」の語り手）の、類似——どちらも「排除された者」に寄りそう被差別者——を指摘するところまで、あと一歩だ。私の見るところ、その「一歩」は、藤村の『椰子の実』と柳田國男の『海上の道』の関連を論じた第七章で踏み出されている。

柳田は晩年、藤村の『椰子の実』の素材は自分が提供した、という挿話をくり返し語った。伊良湖岬で椰子の実を見つけた体験を藤村に話し、それをもとに『椰子の実』はつくられた、というのである。

高橋は、柳田が伊良湖岬で見たものと、藤村の『椰子の実』の違いに目をとめる。藤村と柳田の違いは、藤村が「非動物である椰子の実をあつというまに、何の疑いも生じようもないほど見事に「人」のような存在にしようところと、その椰子の木の根元に「故郷」を見るところ」にある。こうした「藤村によってつくわえられたもの」のおかげで、はじめて柳田は、伊良湖岬の椰子の実から『海上の道』を構想した、と高橋はのべる。

藤村は椰子の実を、漂泊の芸能者のように見なしている。その

ような椰子の実に「われもまた渚を枕　孤身（ひとりみ）の　浮寝の旅ぞ」と、みずからの姿を重ねあわせる——疎外された者、差別された者に、同一化する傾きが藤村にはある。

高橋も指摘するとおり、柳田と藤村の関係は微妙である。無意味と思えるほど「幽鬱」に浸る藤村に、柳田は違和感を覚えていた。

疎外されたものの側に語り手が身を置くことと、作者その人がどうい存在であるかは、べつの問題である。ただし、このちがいはあまいになりやすい。「疎外された者」に同一化しやすい資質は、文学を生み出すうえで不利にははたらない。私の見るところ、藤村はそれを自覚していた。柳田がなじめなかった「藤村の性格のネガティブさ」は、おそらくこの自覚とつながっている。そんな風に考えると、『椰子の実』を論じた第七章と、『破戒』をあつかった第三章のあいだには、接点があることが見えてくる。

高橋はさらに論を進める。『海上の道』が書かれたのは戦後だが、そこで提唱されている「日本文化のルーツは南方にある」という論理は、大東亜共栄圏構想を支えていたイデオロギーと変わらない。藤村の『椰子の実』——明治三〇年に書かれた——とのつながりを強調することは、戦争の痕跡を『海上の道』からぬぐい去る、柳田なりの「アリバイづくり」でもあった。

ここで指摘されている「言説の搾取」と「起源の捏造」も、本書の中心テーマのひとつである。癩患者・北條民雄の「文壇への窓口」を独占することで、北條を架空のキャラクターのごとき存

在に押しやった川端康成（第十章）。葛原勾当の誌した「日記」を加工編集し、「私」の人生を語る入れ物に変貌させた太宰治（第十二章）。「からだを借りて声を出す魂・霊」として神を語る折口信夫も、この問題と深くかわつていた。

そうした折口の靈魂觀を分析した第八章こそ、本書の白眉だろう。折口によれば、天皇はかつて、「魂の容れ物」であつた。天皇の他にも、神靈をからだに宿らせてそのことを伝える「語部」が、部族ごとにいた。これらの「神の代弁者」も「こどもち」の役割が失われたのは、奈良朝のことである。居場所を失つた「語部」たちは、「呪術・祝言其他の方便で、口を養ふ」漂泊芸能者となつた。

右のような折口の議論に対し、高橋は「實際は、神の語部と漂泊芸能者の間の、祝福し語る性質と、身体と霊（ものがたり）という類似への着眼から、折口が二者のつながりを歴史的連続のように述べたもので、構造的な意味での流離芸能者の本源として求められたものが、古代の語部だと言ひ方の方が正しいだろう」とのべる。「被差別の語り手」と「言説の搾取（非他者のことを語ること）」と「起源の捏造」。本書の鍵語が、すべてここに出そろつてゐる。

さらに高橋はいう。「身体が容れ物であることによって、演じるものが神みずからとなり、見る者がそれを神と感じる信仰の構図が崩れていくとき、「古代」は終わる。その終焉の長い連続の上に近代はある」「折口の古代研究が、「喪失の近代」を語るのと似ていると言ひ換えてもよい。失われた世界に心をやるのが

詩人だとすれば、すでにその資格を持ちそうだが、それ以上に、その失われた世界を自ら作り出したという点において、いや、自ら作り出したところのものをあらかじめ失つた時間としてイメージしたという点において、たしかに彼は詩人であつたと思う」

あるタイプの上代文学研究者と話して、しばしばとまどいを感じることがある。「古代人は、現代人とまったくちがう意識をもつてゐた。そのことを肝に銘じて思考するのが本筋である」と彼らはいふ。だが、加持祈禱を本気で信じる古代人は、病院でやっかいな治療を受ける現代人と、似たような顔をして呪法を施されていたにちがいない。現代と異なる「古代」をことさらにとめるのは、モダニストならではの構えである。「今ここ」を撃つために、「今ここにないもの」を持ち出して来るのが彼らの論法である。

折口は、こうしたモダニスト的古代研究者の先駆けであつた。「みこどもち」としての天皇、という彼の概念は、高橋も論じているとおり実証的なものではない。それは、血の論理に支えられた近代天皇制を、相対化しようとして持ち出された「偽りの起源」である。

若き日の折口は、私の目には、まぎれもない美少年と映る。にもかかわらず、作品にあらわれた彼の自己イメージは、「瘧のあゝ醜貌」であつた。漂泊芸能者と同様の「疎外された語り手」を装わないかぎり、「失われた世界」の証言者にはなれないと考えたのだらう。折口のこうしたありかたは、「疎外された語り手」と「起源の捏造」の、たしかつながりを浮きぼりにする。

癩病棟に隔離された作家の「窓口」を演じた川端や、近世の盲人からことばを掠めとった太宰と、折口の共通性はあきらかだ。彼ら三人はまた、椰子の実と同一化する藤村をも彷彿とさせる。「小説は、近代的自我の表現」という古い常識とは裏腹に、「仮構された他者」の代弁者となることが、近代における自己表出の要点なのである。その事実には、本書を読みすすめながら、私はくり返し思いを致した『文学』を捨てた柳田は、こうした構図に抵抗を覚えて、『海上の道』を『美学化』非『政治化』する解毒剤として利用したわけだ。著者はしばしば、演劇を話題にのぼらせるが、それが「架空の他者を代弁する」という、問題意識のあらわれであることはまちがいない。

「古層」と銘打たれた本書を読むことで、「近代」とは何かについて、私は徹底的に再考を迫られた。こうした感じかたは、あるいは高橋の真意に添わないかもしれない。そうであったとしても、これほどの「妄想」を誘発したのだから、本書に秘められた力はしたたかである。

最後に一点だけ。第三章をしめくくる「天皇とは真反対におかれた、あるいは血の論理に繋がる者達とは違う、丑松というさかさまの二世。矛盾多きありのままの社会の重みは、定型の力を逆

手にとつて、この人物の上にのしかかるのである」という記述、あるいは第八章の「身体でも霊（魂）でもなくなっている天皇は、ことのはじめから万世一系の存在であり、唯一、身体と霊の関係における相同的存在である遊離芸能者は、『乞食者（ほかびびと）』として社会構造上のはるか対極に置かれている」という文言——これらを見ると、「被差別者は逆差別する」ということばを幾度も書きつけた、ひとりの文学者の名前を思いうかべないわけにはいかない。

中上健次その人が、卓越した折口論をあらわしていることもあって、この二人を並べて論じる試みはすでになされている。折口論を軸に、近代文学全体を射程に収めた本書でも、中上に重い役割があたえられることを私は期待した。その期待は叶えられなかったが、機会を改めて、中上についてのまとまった仕事を高橋に手がけてもらいたい。ある時期偶像化されたことや、出自がマインリテイであったことも影響して、中上のことばそのものに向きあった好論は意外に少ない。本書にしめされた、語りに対する鋭敏な感覚を知った以上、高橋による中上のモノグラフが一冊にまとめられる日を、私は夢見ずにいられない。

（二〇二二年二月 双文社出版 A5判 三〇四頁 本体四八〇〇円）